

荻野剛史 著

『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス——「ベトナム難民」と「重要な他者」とのかかわりに焦点化して』

(明石書店、2013年)

本書は、「インドシナ難民」として日本政府に受け入れられたベトナム人の定住化過程を、「重要な他者」との個人的な関係性に焦点を当て、著者の専門である福祉社会学の視点から研究したものである。

著者は、公的な支援体制の整備が不十分な日本においては、「ベトナム難民」が生活を安定させていく上で、身近な個人による支援が重要性を増すと想定し、こうした支援を提供する隣近所の人や職場の上司・同僚などを「重要な他者」と定義した。この定義に基づき、日本に定住した30代～50代の男女11人の「ベトナム難民」に、日本での生活および「重要な他者」との関係についての聞き取り調査を実施した。分析の結果明らかになったのは、「ベトナム難民」は、日本において言語や生活費、住居の問題を数十年間一貫して抱え、その「生活のしづらさ」への対応において、「重要な他者」が多大な影響力を持つということである。「ベトナム難民」は、他の人からの紹介や働きかけを通して「重要な他者」を獲得し、その人からの援助で徐々に日本で生活する力をつけていく。しかし、次第に一方的に支援される立場からの脱却を図るようになり、その「重要な他者」との関係が相互扶助的な性質を帯びていくようになる。結論においては、難民への支援に関する専門的知識を持たない個人による厚意に基づく支援の限界を示し、日本の難民支援体制を改善していく上での提言も行っている。

「ベトナム難民」の定住化過程については、書籍として刊行された先行研究もあるが、その多くは1990年代半ばまでの調査を中心とするもので、本書はそれ以降の「ベトナム難民」の生活の様相を示す希少な研究である。こうした学術的な重要性および難民支援体制の改善に関わる提言を含むという本書の社会的意義をふまえた上で、気にかかる点も挙げておきたい。第一は、日本に定住した「ベトナム難民」を静態的にとらえていることである。著者は、「その大多数は現在でも日本で生活しているものと推測」(26頁)しているが、実際には、親族による呼び寄せや結婚、ビジネスを通じて海外に再定住する者やベトナムに帰還する者は少なくない。第二は、日本人と関わりを持たない「ベトナム難民」を、聞き取り調査をしていながら分析の段階で除外した点である。日本人と関わりを持たない人たちにとっての「重要な他者」とは誰なのか、日本人を「重要な他者」とする場合と比べて「生活のしづらさ」の克服の仕方がどのように違うのかを検討していたならば、定住化過程における日本人の役割がより明確になったのではないだろうか。第三は、調査対象者のジェンダーと家族内での位置、出国前の職業が、本研究の分析においてほとんど考慮されていない点である。これらの属性が移住先での適応や人間関係において多大な影響を及ぼすことは、「ベトナム難民」についての日本・海外の先行研究によって指摘されており、本研究の「重要な他者」との関係の分析において言及されていないのが惜まれる。

以上、気になる点を述べたが、本書が難民の定住化支援について、福祉社会学の視点から貴重な示唆を与える一書であることは疑いない。公的支援を到着時に限定し、一般の福祉体制において難民の存在が認知されない日本においては、福祉の観点からの学術的研究とそれに基づく提言が必要である。本研究を嚆矢とし、今後この分野における研究のさらなる発展を期待したい。

吉田道代(摂南大学)